

丹鶴叢書

萬代和歌集 一二



8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4



丹鶴叢書 戊申帙

從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻

萬代和歌集卷第一

春歌上

三事のこゝと 柿本人麻呂

けのまことひるつゆのまへまたのあらきよみくわーも

士生忠見

まやうつとひ日ともうほくのあらーと我やあまむ

承暦二年内裏後番歌合よおど

前中納言匡房

続後撰春上
かづまゆる向の山のねうすもともと立はずむしり
歌不和 源俊彩朝臣

歌不和

源復朝臣

新千葉京歌仲
新長ちよ十日
うみ傳ふるむと

新千載春上

アラカルトのものよりは、おもにアラカルトのものより

アラカルトのものよりは、おもにアラカルトのものより

人丸

續後拾遺春上

続後もめのまく

曉後撰春上

漢書右大辰

新嘉坡之行記

續後拾遺春上

從二位家隆

從二位家隆

朝もさき暮れにまゆのゆゑもすまう

掌根好患

うかの院の事もいかがなれば、おひるをまよひよま
なる瀧の音の事とて、またの物思ひつゝ也
瀧音知春とりますと

襟子肉親王家美作

洞院中宮哥令の

よみへらへ
おと繞

水のよきの底のあらわしを
おと 繰後

徳後 寛平店時を
さいのうみの御令より

藤原伊家

ソトトクタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ
早まちめんと 二條太皇太后宮接津
春のとたまもみれふくつておきあわこゆぢあ
正治百三のまかう

徳後撰春上

後京極接政太政大臣

二ノ本

め玉あさふ一本

シモのさよまきのさよまきのさよまきのさよまきの

後法性も入道前宮右大臣時百三小

後治もも大臣

同春上

まよ一本

むさこのもののまよひのまよひのまよひのまよひのまよ

万

千五百番教入のま

寔善法師

壹向のあがのむすびもじれもあどもももももももも

歌一うす 一本

赤はあつ

いはくもあめうきのくまうりまうりの人のいはくもあ
まのくもあくものくものくも

源信明朝長

徳後拾遺春上

よのくもあくものくものくものくものくものくものくも
入道二品親王道助もの五十三小袖まこと
西園も入道太政大臣

徳後攝春上
えどものあらうとまわらすとみゆふよのひはと

洞院摺政の家百首より

前中納言定家

徳古今雜上

おもてまつせりおもてまつせりおもてまつせりおもてまつせり

延喜十四年女一官屏風

四徳後

紀貫之

徳後攝春上

山いしよくちかくやまくやまくやまくやまくやまくやまくやまく

万葉の中に

同春上

入道前摺政左大臣

哥一本

一品資子内親王

同春上

哥と徳後

あ」のふがくをよむとあまくとあまくとあまくとあまくとあまくとあまく

摺申納主師俊

新徳古今春上

す中納主庭房

新徳古今春上

哥同上

人丸

徳古今春上

徳吉

涼重之

同春上

徳吉

平時軒歌

おひらきさうのいづもやあさるよのうとおもひとる

源仲正

三鷄の山をめぐるのよもやあさるのれいしかくそ

土居門内大臣あるく取事とすと

兼原隆信

保承

繞喜今春上 けいもあらうまほのこすがまくに特の御松

橋上萬と

松井納長方

経同上 一本 仲津治のゆのえをあらうはるの橋もてんじよす
百のえとせひまくわまと

土御門院侍

万

繞喜今春上

伊勢の海の繞喜 やあまのふかく夕富の経同上 あぢのむかしのゆと見

海邊の萬とくふまととよみゆとる

添性入道前至白太政大臣

龍波りゆは かくまのれいがくとよもみくはくまへ
後鳥羽院侍の 歌合うたあそび 隅すみ 隅すみ と

前中納言室家

繞喜今春上

うひごとがれちゆのねのまもくとも引ひき まもくとも

左京右史歌家奇合浦萬と

酒忠季

たるのほりゆふとくやまくやまのまわらまく車

霞陽松よりよまと

兼家為真

志をあらうかとまよひてはるの處にうそもうすがは

殷富の院大輔トモ御付くる四季すじゆ小

前中納言足家

おもむのあと残すも風ふ浪うつむけ花を咲く
みどりよにとてあと云事とよもとてはる

建保侍郎

絶はなせ千のくやあらむ三歳まふをとほのひ

建保口手院唐百葉小

燒干弘徽殿女侍
お合ノ相模

入道あら役太行

侍従乳母

ほりとゆめとくすとくすとくすとくすとくすとく
をあを

燒干載春上

因故院唐付紫がくすとくすとくすとくすとくす

漆威入道あら役太行

民教文範

新徳古今春上

影一もん

人丸

子雲集

新繞古今春上

卷之三

شیخ

白河院の子の小室流入前室太政大臣
通譜本

參議資道

通譜本

東三条北四十歩
左之原風景

王葉賀
子代をくらう玉

承保四年九月廿二日

按皇使宗俊

續後拾遺賀

ପ୍ରମାଣିତ ହେଲା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

小編

風推春上

題一毛氏

卷之三

後魏景陵女傳

風
二
三
系
上

風雅春上

子鳥集

さくがつともまちるの間くわいふせんぐのひよやくをむのする

久あ万葉ノ一 皇太后宮太支俊成

さあらきよとくとくめやかすゆのこゑとくとくよああつてん

西涼の荀子 前大納言忠良

徳古今春上 細葉摘みの枝葉採りて神木へまつぶさのちにさ

建あのは太神あよきもとさひまつむすだ

御すゆに 後鳥羽院清泰

うめの神よまきまき入らまつじゆのまくはせゆ

内大臣の附の百葉ノ一 舟若葉城

入道あお接改丸ちむ

徳後拾遺春上 あくらう流のものあくらゆのあくらやつま

寛喜女房入内辰夙

西園寺入道あき政大臣

あくらゆのあくらゆのあくらゆのあくらゆのあくらゆ

前太政大臣

あめの神ノツカヒツカヒツカヒツカヒツカヒツカヒツカヒツ

まき草事と あ中納言宣也

徳後拾遺春上 あくらゆのあくらゆのあくらゆのあくらゆのあくら

ま保足むだるノ一

從二佐家隆

徳後拾建保二年
内大臣が百葉をかく
歌のひみ

徳拾
せうへう

続千家とよみ

新続古今春上
喜多川柳の歌をもじてぞいとひゆるいに摘ん
跡す
清原源吉文

歌
序

清原源考文

同謹候云あつて
風水がすのあつたが
あるとこども

同春上

大中臣神宣教主

同春上
あらわすはまことにあよさがまのまゝよみがめどりて
鳥魚

卷之三

好也。而其之と和一之也。

堯
後
合

卷之三

惠慶法師

後拾遺春上
一季
後拾遺春上

建保四年九月
行持

卷之三

入道前授政尤古良

萬一ノ葉の焼原ふるはうすくもみの木たゞむらん
妻のすせ方に 九条ま門たせ

六帖題

前大納言為家

王兼春上
王兼春上

卷之三

一條院之河内傳

子鳥文書

子鳥集

後漢大司馬大將

百首歌を詠じたる所は必ずと

龍溪先生嗣

傳道而行之於人也

後拾遺春上
後拾遺春上

之而六十二卦

卷之二

卷之三

後拾遺春上
絶句

卷之三

頌

あらわしのまゝにうなづくおまかせのまゝにうなづくおまかせ

新編古今春上

涼生之女

卷之三

肥後

やあてまむかわくさくはくわくのよしと津やまゆ

建保四年沈清百首ノ一

入をまわ後改せらむせ

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

王室治二年百首
うかく

お大納言あ

王葉春上
徳後撰春上

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

基俊

王葉春上

徳後撰春上

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

基俊

万

右大將道綱母

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

徳吉今春上
後主種松政大改大臣

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

仁和院道二品親王守景家五千首に

歌

王葉春上

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

前中納言國方

おまへお風でしのひのすゑあくをがまのわくせ

赤塗衛門

王葉雜二
あらそもてあまうとくおのたれのまことつる水すらは

中納言完教
鶯とよゆゑ

卷之二

同春上
平藝豐

後法性の入道も實に妙なるものなりと云ふ
信之

萬隆保

不破の事は御心付の事無く御心付の事無く御心付の事無く御心付の事無く御心付の事無く

卷之三

王葉春上
もがきをめぐらす
林の行はる
一草の序

西漢書記載，漢武帝時，有大司馬、大將軍、大司農等十二大員，皆以爲上卿。

王氏之流傳

後編春上

三十餘年中以雪中賞月為第一

入道ニ名親乙巳

まどかのアーティストの才能の発揮する所

惠崇法師

تَعْلِمُونَ مَا لَمْ تَرَوْنَ وَلَا تَرَى مَا فِي
أَعْنَانِكُمْ إِنَّا أَنذَرْنَاكُمْ مِنْ كُلِّ
شَيْءٍ فَإِذَا هُنَّ عَنْهُمْ يَخْفِي

天徳四年内裏歌合の事

升菴集

平蓋盛

一
二

掌
上

蘇原惟保

雅
卷

龍溪先生題補卷之二

子集系長寧

其事一審と云ふ事也其事は當に考へ
白の事也。すれども、
あめ玉
あめ玉

花山院傳業

五
七月
中
卷

同春上
人九

繞後換春上

延喜十二年亨子院哥会の文

藤原與風

卷之三

後撰 女情山溪子
女王あらうをひき

つるの木まどかがひなたのあはれなう

新刊号とくじ

新千載春上

子鳥壹

春情在鶯とりすきと

前中納言達家

家 隆 一 本

このおはなーおはなーおはなーおはなーおはなーおはなー

百之序中了

すが政をもと

おたふくもむかわくのまほの様がやうだい

梅益之集

卷之三

中道病

1

俊惠法師

まほ内裏万葉歌合のふ
四年繞十

2

八系院詩合

1

四

（中略）

源云忠朝臣

丹雀

深信勿疑

一ノ十四

王葉春上
かくやのトヨ向くるうきのむせび一ものもなまへる

繞古今春上

繞古今春上

徳古ニテモ代敏行
経度の少くも
亦即時落一歩で
セシムハナム

本立書有二之今生書之

堯古今惟上

馬內傳

梅花の咲く志津川の山中

大像欽定摹母

トヨシタマムラ
木下はとよとくまのむら
村に木の下のむら

新刻古今集上

式子內親王

なもむきはしづちのむすびも併のどきの宿の梅のえ
あらの鶴とうづと

壳拾遺卷上

まつも芽としまもちの草むらの根ひもとてを土
垣根寄せといふよ

太宰檉師經信

楊公之孫某不識其人也

卷之三

向こうも丁度もねじりたつや横溝との連絡があ

子鳥叢書

千五百葉を含む

宮内卿

梅のものあつたがねも被て匂へ春めくを

寛喜女侍入角辰風のう

太政大臣

四月とも匂へよしもみのそぞ先の梅のふせりの聲

天徳四年内裏よりて

中納朝ち

ワセの梅の枝のうらぎハ風のすきに鳥とすみに

歌へらん 平兼盛

玉葉春上

さくめあらわのうせの梅の枝のうらぎをもひれ

人麻呂

徳古今春上

つゝ宿みゆく柄と月のうらぎもひれものな

美久えまむ正月内裏よりて歌梅の枝のうらぎと

藤原佐東翁

被ふてあるとひまく梅の枝のうらぎをもひれ

百川せうむまくはるかに梅の枝のうらぎと

前太政大臣

たらざとの梅の主枝とてほんじのうらぎをもひれ

皇太后宮太支使女

徳古今春上
宝治二年百

はまくはれと匂ふ梅の香の風すむあまん

美の院小室お

梅のことをほりとひ風ハまくとむととへと先けも

春も中

あた納ま為家

子も又狂る面う梅じたのせせうてととえなたて

中納も定頼

徳後撰春上

け徳後

寒もわづる被のうつふすそれ者のうらうひ

清息所

夏原懐子

ふかよきがみゆまと梅じまととと被よもとめく

家の梅

花本

へ本

和鳥の部

玉葉春上

又の絶よちもちやうん梅じまとくよおもひおもひ

絶一

源師光

せ一本

王

色よもぎよもぎあるうれ秋霜の梅じまとのうめよもぎ

毛よもぎよもぎあるうれ秋霜の梅じまとのうめよもぎ

三國ばゆ

梅枝よふもつじもととくすにあやがいのよもぎ

本わねのむりうきくはるく

躬恆

玉葉春下西玉
さくら玉
ハ玉

大江嘉言

なほかうのゆきをかみそるはなはなむかの

東北の少子化 民部の長家

鳥
類
志

繞古今春上

梅不老先生詩集卷之三

申納之家持
此石以記
燒後拾遺
春上

總後持還春上

好
志

卷之三

裸子內親王

只今おとこさんある月給のお仕事なつてやうやく

中
啟

新嘉坡之行，其間有月，乃以新嘉坡之名。

小式部内侍

繞後撰春下
其もまつやなみよそのおのせもとらてゆる月影

宣
上

子雀書

一
八

お月を新月のまゝのまゝと見ては又一月

秉久二年內吉

入道前指改尼古尼

右
本

新続古宝治百卷目
東久保小

山階入道前左大臣

新篤古今春上

拉大納之重稿

新編古今春上

卷之三

続古今女情物語の
やりとりとおなじよる
やうやくひらくとて傳
うとううはせハまぐこの目
うむせらる

續古今憲三

A*v*

後、京極、按、改太政大臣

御ゆるよの程なまき多々うきめゆるもの様す。おる御火
後高松攝政事六月不當か否。」春曙と

藤原達仲

卷之三

何不以爲子也。子曰：「吾與之。」

卷之三

建保序製衣

續古今春上

柳とさくら
三傳子一本

前中納言巴房

佐保殿の御まわしのま枝とげつやまんまとふ風

孫原基後

徳後撰春上
新徳古今春上

延長七年内裏序廬風の手

貫之

春毎にたまきぬ柳の風りすらあつまひる

歌くらへ

忠見

ち柳のあらうもむら柳とあへどもあへ月日ちうら

西中柳とうてまゆ

徳子内裏をあ譲及

まゆのすまゆとよみづきせせの柳をつまゆけま

やれととよすはる

太宰橙呻経信

のとくれる風のうちふま柳のあらうもむら柳と

建保四年院序五年

前中納定家

あとふうなまめの玉柳のうちふま柳と

入道ニ品親王道助家五十三ふ岸柳と

源家長経

立田のこもの山の古やれとよすあらもとあるも

柳と

よすあらへ

いとく枝よむらもま柳のむらむらはあらゆる

廉義の家う合のよ

空風のふとよひ玉柳枝のひまむらぬむらし

春雨も

你も又

続後拾遺春上

まもやなまもんゆまくらのすくわをはる

太宰大式(ささき)

春雨のすまみゆはれのれのすくわをはる

周防内侍

まくのくわもむらひかくの持がうきすくわ

主之女

新刊載雜上さくじまくのくわもむらひかくの持がうきすくわ

万葉集モモカタの叶もカタ

前大納言良

続古今雜上

春あめあまの狂むのめくらまたおもゆくらやくくわ
がくわあくわと

桔井幼長方

続後撰春中

日のくくゆふまくらあめくらのくらのくら
種の内祝が度申まくらあくら

出羽

玉葉春上 ササエ

まくわくわくわくわくわくわくわくわく
まくわくわくわくわくわくわくわくわく

升菴集

一ノ歩一

徳後撰春上

西漢書上記載着漢高祖與項
王爭天下，漢高祖得勝，

新千寶治二年後
嵯峨院廿首

看山院前內大臣

新子載雜上

卷之三

參議經藝部考令事

平也度象也

事無不可

深
頤

王華春上

和風詩詠

其の後も又其の如きの事は多く見受けられ
早朝を徘徊する

小
纂

御内閣の事務
おまかせ

此卷之題目皆用漢文，惟此題用蒙古文。

好
志

前半のやうの落葉はまだ少し残るが、この間の落葉
は多くすでに吹き飛んでしまつた。

惠慶法師

此詩題作《送人歸蜀》。詩中寫送人歸蜀，但全詩並無送別之意，而是以送別之形，抒發自己對蜀地的懷念和對理想的追求。詩句大意為：蜀道難，難於上青天，我心長悲愁。我生於蜀，長於蜀，我愛蜀，我戀蜀，我願歸蜀。我願歸蜀，我願歸蜀，我願歸蜀。

俊毅齋序

مکالمہ میں اپنے بھائی کو دیکھنے کا انتظار کر رہا تھا۔

同上

如是等事皆是汝所知者

卷之三

卷之三

後漢書

此中間有數處之石碑，其文皆為漢文，其字體亦為漢字，其書寫亦為漢書，其刻畫亦為漢畫，其內容亦為漢史，其年代亦為漢代。

花山院詩集

惟是其事也。故曰：「子雲之賦，漢賦之祖也。」

太宰權帥經信

卷之三

從二位家降

此卷之序文，皆是其子孫所傳，非其真筆。

裸子內親王家或移

お前が丹後
塔の山の向うに立つてゐる

河肉

花子

卷之三

後拾遺書卷下

後拾遺書下
後拾遺書上
後拾遺書中

前中納言臣房

襍子內親王

此の御子は、おまかせの御子と申す。おまかせの御子は、おまかせの御子と申す。

山林中之物也。故其名曰山林。

家の精道場

鳥羽院詩集

ふるのまきつねうすまきハ花多よりまくらを

後鳥羽院侍書

徳後撰春中

まもこのみをかむよがひむやくやまくす
三十日御手す

八條院侍書

玉葉春上

おもむくあはる花のひととあはる
前後政事とおのぞきをひる花とす
ことと

前大納言爲家

ほやのとがひり重とうほひに
まへ

藤原源祐

見ゆもとりまと 俊朝新主

おもむくわづとめすけい

人唐

徳本載春上

おもむくよがひの抄文とめんばくすの本

和泉式部

同春上

おもむくわづとめんばくすの抄文とめんばくすの本

天暦九年三月侍御の抄文とめんばくすの本

おもむくわづとめんばくすの抄文とめんばくすの本

おもむくせきのとめんばくすの本

天慶

守鳥夷書

新年

月方侍御の抄文

おもむくわづとめんばくすの本

おもむくわづとめんばくすの本

おもむくわづとめんばくすの本

おもむくわづとめんばくすの本

おもむくわづとめんばくすの本

おもむくわづとめんばくすの本

新十載春上
ひるやく小桜もあらがふとてあめ
範長翁もまつゆまくよしむらを

範長

白河院清製

同春上
とくとく新十
春の花やうすに飛もぐる人のよひておれ

百川屋歌の半に 土居の清居

新後撰卷中
ひるやく桜もすこすすくら桜もすくら
さくらの葉もすくら葉もすくら

さくらの葉もすくら葉もすくら
さくらの葉もすくら葉もすくら

さくらの葉もすくら葉もすくら
さくらの葉もすくら葉もすくら

醍醐院も太政大臣

新後撰卷中
ひるやく桜もすこすくら桜もすくら
さくらの葉もすくら葉もすくら

たまはす合へゆじま

正三位家

ひるやく桜もすくら桜もすくら

金山花もすくと 六条右大臣

ひるやく桜もすくら桜もすくら

也かゆう 桂中納言侍後

ひるやく桜もすくら桜もすくら

藤原惠房也

ひるやく桜もすくら桜もすくら

爰京宣德院也

続後拾 永承五年
祐子内親王あら合
ひるやく

あらわす様はまことにあん

綰千載春下
不荒于

夏原清補錄

田舎の事で御心配な事はござりません

王氏春下

里ハシタニモトヨリの様ハナムギノキニ

風延喜十六年高
院屏风か人のもの
かと云ふ

100

延喜十八年勅院屏風の文

卷之三

風雅春中

卷之三

藏書之印

夷
志
國
志

後法性寺入乞

花下晚月と云ふと 中院入道右大臣
徳千載春下

玉葉春下贈皇后宮

ちとなくなりふれどもあとの事は

卷之三

繞後拾遺春上

繞後
卷之二

おもむろよを
入道す様改た大也
かのねむる秋の風もくすみ花のすらとよむくらむん

丹鳥長書

西園寺入道とよみ侍

西園寺入道太政大臣

春氣すらなれぬがおなまへはるひのむら

桂大納言相

もとくわざきの桜も又もとくわざきのむら

權大納言基

はやめむとくわざきの桜もとくわざきのむら

も中納言元

新続古今春上後京極政商太政大臣

三本

花のむとくわざきの桜もとくわざきのむら

十之三あまむと 菅原源氏

燒拾遺春中

清時歌也

かわうけすとくわざきの桜もとくわざきのむら

惠美は柳

長安院

は原元輔

かわうけすとくわざきの桜もとくわざきのむら

赤峰萬

かわうけすとくわざきの桜もとくわざきのむら

出羽義

尹雀書

一七八

卷之三

凡人所見者皆是也。故曰：「吾不知吾所以知。」

卷之三

萬代和歌集卷第二

春歌下

堯文集

題不_知

按察使公任

後後指卷中
日曉後

花向玉情多

太宰糧師經保

信五

中納言完邦

志の如きは、その事に付するものとす。

文選卷之三

大於唐之右大臣

新文載春下

花之子孫也。源氏體貌俊
日人言之

時人論

その御子の御心の事と云ふ事の如きの如きの事
その御心の事と云ふ事の如きの如きの事

卷之三

卷之三

卷之三

風雅春中
詠鶯題照

卷之三

新猿古入ノ春下
新猿古

人九

道編

後新御事下すをもる屏風

卷之三

國朝之時，有司之官，皆以考課為事。故其時之士人，多以考課為事。

卷之三

前中納言定家

おもひのゆきのまゝにあつた。まことに、おもひのゆきのまゝにあつた。

中納言基徳よりひつてしむる

前中納言國房

がくくはくま金きくまかくくわんの事をもとて小せよ

右大臣のゆゑに詔書を以て

篠吉今春下
ヤマハナミナシトモジテ御宿本の花をそくの時がまくさ

西園寺入道太政大臣家花十数本

松大納言公相

是のこのひのまみ紙とまみ紙をまわすほくじむくくりの

花のまみ紙小三條右大臣相手すてはうの又の

玉葉春下 中納言基徳

日づく詩

玉葉春下 同上

玉葉春下 玉葉本

花をそくの時がまくさ

花時心不静とひまこと

篠後拾遺春下

風促一位倫子春日
物語源兼資持
花をそく車をそく
おもむく樹をそく
物語源兼資持

車をそく車をそく

赤は唐

風雅春上
ややくらすむせのさよまがるのうづくとくふ

このむとく

馬内侍

おとこなみハシツ一様むきよ匂ひとまつまつ

長治二年二月中あゆむ見ゆふもつ

うきよ

上総

おまかへまくらむとせよとくわざをせり

ほり虎尾町西多病と

祐子内親王家紀伴

たとくのめぐらすまちの風ア一句

のじむとすと 參議頭實

ひくのはくづかのさよまくさむのうづくとく

花是よまくはくすとす

続後拾遺卷下

あくよもくとてとてとてとてとてとてとてとて

義磨二年中敵う食ひ

源政長胡

車とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

題不ち 無風

そのよそぞれ花つてらすやちよとくとくとくとく

続吉元方
新拾遺卷上
奥风

風延喜十四年二月
宮原凡

忠見

風雅春中
山の音の如きは、萬葉の音也。

諸本流後

鳥羽沈御時海胡是乞之于王侯

後三象肉大臣

其後又復有此之說也

嘉慶二年二月上因歌沈子銳花之

大藏文書

故鄉花已
民鄙渴成荒

卷之三

徳古今春下
かくのよもやのよもよひの人のよもよも
民教の経房家を今よしと

前中納言資實

正月廿二日
同春中
皇太后大喜成

名はいふ事無く、一月の間のむづやきは様子が變つてゐる。

卷之三

大納立兼宗

今當之時
則知者智也
行者勇也
能安者仁也
能忍者義也
能樂者樂也

丹烏集書

徳後撰卷中

さうぬまむとせうもせふ又ましゐるゝ稱の事

皇居店舗大支俊成のもの十数軒

後室院信教也

えみのとくは橋はまくまくしゆくまのすくまくら

花まやや一
衣笠も肉大臣

家良本

程もほそくよだたうこのどくよきあめなりとなま

寛居立身寂勝薄師坊う令ふ

もが僅ひ行賈

白きのれいもくちのこまく敵もまのまくまくま

遙見うむとよやまと

藤原を従弟也

伊豆の尾くまくまくら橋むおとみくまくらやまくまく

まかの齋もたのむ

四三十九

もかくかくもくもくくくくくくくくくくくくくく

白きの尾くまくまくら後半九十度屋風もひと

前大納言も

よのくくハ花もくくもくつもくくくくくくくくくく

花もくくくくくくくくくくくく

す中納言也

徳後撰卷中

風雅春中
白きのさくらやつづかせのこゑの花をうらも

元亨セウル二月十七日前田種の手書

鏡後撰春下
はあまくほんよ

詩表

宮人のくどみとさくらをうらむよもくかな
あ一本
もめよ後

天德四年内裏致官の手

中納言胡志

あめがまとつゆよもとふき揚ひとむるのよゑに
尋ね花とりまと 檜大怪教慶也
参りておもひとまじめのよまとハ歌ひてこめう
漆葉を入とすお家屋風の歌

続古今春上

兼原長能

一本

よもよもとよもよもとよもよもよもよもよもよも

行人萬むとり事と

佐藤宗助

志すと人とくすとや神宿カミスカ一本とせらるるをあくせと
歌不ら 菊原光承歌也
あくすとくすとくすとくすとくすとくすとくすと
山を遙望とすと

兼原仲家

はあまくほんよもくかな

尹齋遺書

西園寺の花のとよみ

前太政大臣

徳古今春下
そ続吉

西游法師

新堯古今春下

まほつか

卷之三

王漁洋

11

卷之二

長治二年正月仲夏女史詩人徐子敬

卷之三

本草綱目

花と人間の物語

為中納言也

えぬ人よまきくまきあひゆきわらひとくまきをくまきをうか

小風

中春撰後曉

卷之三

丹烏臺

はるかにわざわざの役立達の手で

聖武天皇御製

風雅春申

白河院詩集

少卿作詩時在是店。辛未

大官事太政大臣

王
葉春下

仲納之能季

優格 今上の優勝後上
のくじで又おもて出
たが小中あめはく
すうとく人をひそ

130

後冷泉院清時乾新盛
成家

增補卷之三

うのまへるの向ひのまへるのまへるのまへるのまへる

卷之三

大部之位

近得涼州歌

建保序

おおきな手紙をうけたのである。この手紙は、前大納言の良

前大紳士之良

主の御心を承る事無く御心の如きを御存じな

延喜十三年五月五日
中納言大内

鳥風

德後撰春中

鳳

中華書局影印

此の事は一教の事と傳承する

花山院清巒

玉葉春下
是花日嘗
擣為仲多也

卷之三

王榮春下
梅已老
子不歸
又日暮
不知何
處

山すと林麻の里のとかむじよしのまかがふるけも

まちひやふ

能宣教主

徳後拾遺春下

おせんがおひつてひつてひもやくてもももよの月

祐子内親王家すなう様と

舞原を經胡玉

風雅春中

徳千人あす千人
あくよみ。

おもと見くらへしのむすびもつねもつねもつね
むと見くらへしのむすびもつねもつねもつね

前大納言師上

五

五兼春下

花山院唐萼

お二本

おほくよりまかんまのよむとおまくらり

徳千載雜上

あす指収大納言

おほくよりまかんまのよむとおまくらり

徳千載雜下

おほくよりまかんまのよむとおまくらり

前太政大臣

徳後撰春中

おもと見くらへしのむすびもつねもつねもつね

四年徳後

きく内裏を着たる衣の

二條院後政

後漢書卷中
丁巳夏
新草

按察使の任の人の多くある様のもとをも
せよはるかにまつまつと

新編卷下

新
一

古のものゝうつすあはれの心の爲めに
辛子年春

卷之三

謙流公

風ふみかまくらまのむすびをもつてやう。

王葉雜一
也譜本

赤壁賦

毛諸本

達保四庫院停不至

入道前指改左至右

徳川家宣上
おやのいとおのじゆ

徳後宝治元年二
月前太政大臣西園さ
きかの御幸さうく
花内優せうせうく
日よりあらわす

同書中
おもひ事本のよしとよしのよしとよし

新石器
中納之名浦

施設の如きは、必ずしも、その目的を達するに役立つものであつた。

太宰穆師經信

花はうとうとてのまことをうかがふる。我あく

従二位家隆

あらそがくらへるまん様むじよへりかくすまく

毎年花とみるよとすと

藤原時房

花がうとうとてのまことをうかがふる。我あく

源経法師

花がうとうとてのまことをうかがふる。我あく

永源法比

花がうとうとてのまことをうかがふる。我あく

五

花をのぞむるを 西園も入る前太政大臣
海をもよむるを おもひかくとも病ひの花を
花と春向とすと

前参議堂政

花をのぞむるを 人ひのまもよあくとも

東方中ノア 芳部成英

花をもよむるを おもひかくとも病ひの花を

嘉保ニ年尚達念のと

高階經成胡子

花をのぞむるを おもひかくとも病ひの花を

達保四季院詩百首

續後撰春下

西園入道前後文

卷之三

人丸

卷之三

德
才
載
春
下

花山院萬惠

風雨のうちよみと
行ふ

萬葉の様まいと/or/風雅春下
雨牛元よりと 中納言之教

卷之三

壳後撰春下

人丸

春情をもとよりすまへと

擣俊綢胡玉

まうるのかくわの様ひまうらを白紙にう
清世の月漏るよまうらの花くはなふ
譲一本

うのとあるかくはんのうをうながす

陽明門院の形勢より見る所内と外の城郭
の構造の入の日花のまゝとほどのも

卷之三

批把宣太后文

德古今春下

美保三手中之女方草花見上リ言ひて之を

草花日華

卷之三

花をうかがひのまゝのまゝくらへるがよからずや

白居易集

卷之三

卷下

前集議事長

新千載春下
ものづきかこむ花^{人也}
かみよだれ小枝^{人也}

花のちよと
壬生丸冬

天國四季向ま衣うなぎの身

卷之三

徐後拾遺卷一

まのあやこ 一不資子内親王

花作妻友よしよし

基俊

新後拾 花のちうら
とくとある

新後拾春中

詠不ち 俊直法師

新後拾遺春下

まよやうにかかれてまよひをすまひがくらかし

西行法師

氣秉

まも人の波まくるさくを風あすめはまくわれ

よみむらら

ト

徳後拾 遺春下

会のく

まよやうの風まくるまよひとまよひのまよひをまよひ

大中寺教主教尼

徳後拾遺春下

花と月後へく

花と月後へく

伴夢

徳後拾 遺春下

花と月後へく

徳古今雜上
風 ふ 一本
風のよきあらわすか様むことくとくすまふすまく傳

花と月後へく 花院清製

徳古今雜上
風のよきあらわすか様むことくとくすまふすまく傳

見ゆとよすまと 太宰桂脚經信

徳古今雜上
風のよきあらわすか様むことくとくすまふすまく傳

詠一ノ
そ因法師

徳古今雜上
風のよきあらわすか様むことくとくすまふすまく傳

詠一ノ
法橋頭眼

おはなうへとまくらをひきてひるのむねをまくらあす

通鑑

徳干載春下

おはなうへとまくらをひきてひるのむねをまくらあす

小式部内侍

も本玉

徳後久あひまか
徳後久あひまか

徳後撰春中

皇太后えま俊成

新徳古今春下

五牛毛毛詠中れ 後鳥羽院侍製

新徳古今春下

おはなうへとまくらをひきてひるのむねをまくらあす

徳干載春下

建保清製

徳干載春下

一品資皇子内親王

徳干載春下

散このひよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

玉葉春下

長治二年壬二月申寅も亥の次ノイヨリ侍

家ふ

申ほの肉大玉

徳干載春下

九重ふうつまくらをひきてひるのむねをまくらあす

花あひまか

太宰捨肺經信

同春下

東風のひよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

神祇伯歌仲

玉葉雜上

さくらにちかくむとすがわくわくとよもよしむるをうなづく

洞院抄政事の言ふもと

白木后宮太夫俊成女

徳後撰春下

さくらにちかくむとすがわくわくとよもよしむるをうなづく

花す中ふ

徳古今春下

鷹司院抄素

徳古今春下

さくらにちかくむとすがわくわくとよもよしむるをうなづく

葉壁つ流サ持

徳古今春下

さくらにちかくむとすがわくわくとよもよしむるをうなづく

葉原を雅新也

徳古今春下

さくらにちかくむとすがわくわくとよもよしむるをうなづく

南殿ひむくとよす侍

一條院三内侍

此奇詞名共諸本死之一本補之

絶不和

徳本載雜上

中務卿親王昌平

花

ちよとからくじよ一月のひよめくかよこみたき

きのひよめくかよこみたき

のひよめくとよす

赤條まつ

おひよめくとよす

ひと里ひよくとよす

藤原充也

おひよめくとよす

風雅の名とよす
人より小さきの名
のやうとよす

風雅春下

是花の事と申す

蘇居士家

おまえの心は花とお葉の柄の風かみの歌

卷之三

故人不以爲子也。故人之子也。故人之子也。

大中至能宣教院

（中略）

壳後撰春下

送三位以能

前大納言為家の家臣百人を

集原信室

同春下

後京移授政事六百萬餘部不計

法橋題照

萬葉集の歌と書寫の歌

卷之三

甲子長明

続古今春下
このいふ本多の之後の答風より移す。一九〇六年二月三日

堀江院鳥羽後より行幸の日詠と花と

校大綱之二

おおへりと

前だらう待てよ

右諸本

新後拾遺春下 藤原公方教民

くわくあくとおどもめがみの波の花のみのまののを

六十日侍ひ中ふ 後鳥羽院侍裏

続千載春下

花がうさうのあづみの風を苦しきてまほ風をう

百首うちふ

人を前指政たむせ

新千載春下

れづれづののさくはなきあくまつ風をう

情むじまきと 刑部久範無

じよよよれむすむすむとしむじのまくとまくと

祐昌法師

万

仁和ち入道ニヨリ親モ 守光ち五十年に

慶延法師

おおへりとおどもめがみの波の花のみのまののを

慈謹大僧正

くわくあくとおどもめがみの波の花のみのまののを

三條右太吉の内侍すく侍ひよ

中納言重輔

まほ風をうさうの花と教えくわくとおどもめがみのを

前だらう侍てよ

捕妻使の任

花の下をかきまわす事と教へよる所がくる

糸原院住持

あくまほよじのとがまくとがまくとがまく

社のものちから

かの成助

年高の者をもめつてやうがふかまつまつてあひと

依舊待人よりゆきと

般窟門院大輔

新千載春下

花の下
宍超法師

徳後拾遺春下

とくともはよおき物を構むらむるくらむけも

寔進法師

とくともはよおき物を構むらむるくらむけも

涼師光

とくともはよおき物を構むらむるくらむけも

洞院抄改家不首小

九条お田大主

とくともはよおき物を構むらむるくらむけも

徳後撰春下

百舌鳥中

常陸院信義

大炊店の若太夫
続後拾遺春下

続後拾
冬あ六年
常陰傳
新後拾
春下

続後拾遺春下

まくあやーひもたまきつてまなむ人をもむか
まくらるるぬひそむう　土井の内大臣
まくらるるぬひそむう　月夜の花をうかべる

躬恆

まくらるるぬひそむう　月夜の花をうかべる
月夜の花をうかべる

後冷泉院門裏

まくのうのかをめくさの月夜の花をうかべる
新後拾遺春下

太宰持傳經佐

新後拾遺春下

正治門下三よ

後鳥羽院門裏

まくのうのかをめくさの月夜の花をうかべる

右太宰の付の有三よ

後法性院前御事向太政大臣
まくらるるぬひそむう　月夜の花をうかべる

あづみふとすゆゆふとすゆふ

入道主折枝左大臣

徳後撰春下

同春下都芳門院安藝

前也むを

侍賢院も義

かくもう揚ちよしよづのまくはひのふく

落花隨風よよと

波のうきよみよのうきよみよのうきよみよのうきよみよのう

りよと風むと一本

中也入道右士也

みゆみよのうきよみよのうきよみよのうきよみよのうきよみよのう

徳左也也 長實

かくもう揚ちよしよづのまくはひのむとよよと

徳左也也 諸本

徳倉也也

波のうきよみよのうきよみよのうきよみよのうきよみよのう

建保内裏百番詩会の歌

徳後撰春下

同春下都芳門院安藝

前太政大臣

諸本 德前

初唐のうきよみよのうきよみよのうきよみよのう

おがい内裏詩會の上花と

前中納言宅家

徳後撰春下

同春下都芳門院安藝

名前ものうきよみよのうきよみよのうきよみよのう

あやめもうきよみよのう

通 諸本

よもうきよみよのうきよみよのうきよみよのう

少く一花へすまへるはよもつてしゆらひ

まくはりまくはり 赤染ほつ

玉葉春下
花とよもじらぬむかひのすきをとむすけむゆゑ

洞院指政家正首ノ

藤原信宣教主

まくはりおとくのよもじらぬむかひのすきとむすけむ

萬之教主

紀本
萬之

まくはりおとくのよもじらぬむかひのすきとむすけむ

射恒

まくはりおとくのよもじらぬむかひのすきとむすけむ

左京主頭輔

まくはりおとくのよもじらぬむかひのすきとむすけむ

久安正三ノ

待賢の御堀

まくはりおとくのよもじらぬむかひのすきとむすけむ

射一三ノ

著本

和泉の武教

まくはりおとくのよもじらぬむかひのすきとむすけむ

久宗内大臣

まくはりおとくのよもじらぬむかひのすきとむすけむ

堀の院は万葉小量菜と

太官大臣主支御教

前中納言完家

徳後拾遺春下

喜のゆきの風のつよひつよひとやめん種くわくま

すみと

藤原經衡

もゆ 德後拾

胡のゆきの風のほのかに摘まむかうるうり

山本 一本

好古

きえと極あらうるのとすよまよはまのま

寛和二年内主不吉の歌をと

森島惟成

徳後拾遺春下

けうのゆきの風ア約なうりくわくらへのモ

題一
忠見

諸本

桂うのゆきの風アホキの風アホキの風アホキの風

風雅春下

元真

同上

八風
翁のゆきの風アホキの風アホキの風アホキの風アホキの風

さう

桂うのゆきの風アホキの風アホキの風アホキの風アホキの風

氏経成範

桂うのゆきの風アホキの風アホキの風アホキの風アホキの風

千五百葉御歌

皇太子玄太俊成

幕壁門院サ将

うかうかとおもひてゐたのをよみがへるのうれしさ

王葉春下

其後女

中納宣教

自注

विनाशक विनाशक विनाशक विनाशक

篤拾遺春下

玉音の井手の江風
はよるかくらむかくらむのふ
ゆくのむ
ゆくのむ

主
俊

其子孫多以爲公卿者可紀

西漢書

その代の事やめます。杜氏がお人で、一いぬまな
殿富つ院大捕まえます。そぞう

卷之三

歌すも

射恒

さくわーおおひよーおは下を落すよあくゆ

能宣歌も

まかよーおおひよーおは下を落すよあくゆ

四條太皇太后下モロイ
諸本

さくわーおおひよーおは下を落すよあくゆ

堀河院侍時の後玉子下モロイ
躰躅と

神祇伯歌仲

さくわーおおひよーおは下を落すよあくゆ

麻壺マツカの舞せせせせせせ

天磨脚裝

さくわーおおひよーおは下を落すよあくゆ

度也と
菅原太政大臣

さくわーおおひよーおは下を落すよあくゆ

貫之

続古今春下

さくわーおおひよーおは下を落すよあくゆ

延喜十二年章子院御内ノミ

射恒

さくわーおおひよーおは下を落すよあくゆ

三百六十卷之末小好也

事成るにあらず候事の事は多くある

萬物が心地よきと

三條入道たゞま

萬物が心地よき萬物の心地よき見ゆ
此を無と云ふと是全て云ひ得

萬物も心地よき萬物の心地よき萬物の

心地よき萬物と本中原而起致也

萬物の心地よき萬物の心地よき萬物の

正治不景ア 促ニ位家隆

万

後鳥羽院清泰一本 烧古

萬物が心地よき萬物の心地よき萬物の

後法性入是間太政大臣

萬物が心地よき萬物の心地よき萬物の

萬物が心地よき萬物の心地よき萬物の

萬物が心地よき萬物の心地よき萬物の

二條院清時おもとリすと

桔梗納三宮國

萬物が心地よき萬物の心地よき萬物の

襟子内親王家式教

西行法師

千五百事あらゆ
のもう一本

カタマリの如きは、必ず月

正治元年
前大藏主院房

卷之三

此中人語云：不足為外人道也。既出，得其船，便扶向路，

百川千流皆入海
詩謹本

權大納言宣雄

なまけぬのうきよかねとせんじゆうの

大江千里

故人知我心，不以爲我愚。

玉葉春下

花火もあつたんとあるとおもひます

名利微之逐日看花

萬葉志稿

萬葉集卷之三

卷之三

卷之三

大傳教永超

毛氏集解

永嘉子言

宣
上

此卷之書皆為其子所寫

二月廿八日

二條太皇太后御持津

塔川院清時筆

拉伊納之信

風すみのくわふう
殿富門院大浦とんぼりもんいんだいほ

風雅春下ふうがしゅんげ

若水

身よそはたまくらむかひのまやくもかくも
之月おのひとと 津ちよ基

以風のままでおとおとおとおとがくすまひゆん

當富院侍阿お卯とむねひとと

後三條内大臣ごさんじょうないだいじん

人よがれとくめやゆせうてよもうくひりくまちか

天流四年内てんりゅうよんねんまわすかの

中納なかなちむか

花よがれとくめやゆせうてよもうくひりくまちか

八條院六条やじょういんろくじょう

くもくわくまもとくちくくや又くまくもとくくわくもと
洞院持政家百三十とういんぢせいかひゃくさんじゅう

前中納まへなかなちむか

がくまくわくつあくむのまくはあくようとけよどきくまくわく

ま保四条院侍不^トま

從二位家隆じゆにゐいえりゅう

光うきのまくわくまのまくはあくようとけよどきくまくわく
情くまくわく

結縁經正けいえんじゆう

右兵衛うへ曾基氏そき

徳古今雜上とくこきんざじょう

花徳古はなとくこ

徳後とくごうちうちののば

徳後撰

雜上

正三位知家

このまことに身をすくめの者であつて食あへぬ
所を教わるけれども

ナ將内侍

ひよせんかあくねともあすかまつて別のまことひ
久も下あ一本前ア 萩原通政ア
あやかしもとすもとくもとくもとくもとくもとくもと
百もも中ア後高極ア政太政大臣
きりのまの別のうへに附てのまこと一踏あふの事

三月畫のこゑを 花山院侍御
をあやかしもとくもとくもとくもとくもとくもとくもと
中納定頼女

遇するまことにあゆみに就くうへのえア絶
えま之

桜も散すにあゆみに就くうへの別のまことの事
延喜侍時より

三月あと

貫之

風雅春下ア 諸本ア 一本ア

新後拾遺春下

つむくと
新後拾

シテ

ミテ

あくまやうな花をうたふよとまのはとくと
うきかきあそぶかやうめまちあひと

さくまやうむのうけり詠

あこ一本

